42

平成17年4月8日

明珠

龍泉院
参禅会会報

従容録に学ぶ（三六）

第一五則　仰山挿鍬

〔示　衆〕

衆に示して云く、未だ語らざる先に知るは、之を黙論と謂う。明さざれども自ずから顕わるるは、之を暗機と謂う。三門の前にて合掌し、両廊下にて行道するは、箇た意度あり。中庭上にて舞いを作し、後門外にて搖頭するは、又た作麼生。

〔本　則〕

挙す、潙山、仰山に問う、甚処より来る（是れ、来る処を知らざるにはあらず）。仰云く、田の中より来る（你、為甚にか草に落つ）。山云く、田の中は多少の人ぞ（只だ父子両箇のみ）。仰、鍬子を挿下て叉手して立つ（放去かば較危うからん）。山云く、南山には太だ人あって茆を刈る（草を打って蛇を驚かす）。仰、鍬子を拈って便ち行く（収来は太だ速かなり）。

今回は、仰山慧寂（八〇三～八八七）が主人公の一則です。この方は、お師匠さまの潙山霊祐とともに禅門五家の一つである潙仰宗の開祖とされる英傑であります。ここでは初登場ですが、『従容録』ではほかに第二六則、三二則、七七則、九〇則の四つがあり、合計五則が収められています。本則は宏智さんの採録ですから、宏智はいかに仰山を高く評価していたかが察しられます。

仰山は、六祖慧能さまと同じ広東省の人で、かっての六祖さまの道場、韶関市の南華寺で出家しました。のちに湖南省の大潙山で霊祐さんに師侍し、その法を嗣ぎます。その後は江西省の仰山で道場を開き、四方に英名をはせた禅匠でした。語録が伝えられているほか、仰山は門人たちを指導するとき、特にさまざまな円相を多用する宗風をもっていました。

円相というシンボリックな使用の起源は、唐代の禅門からといわれますが、禅僧たちは真理を示すために好んで円相を用いました。仰山には実に九六通りの円相があり、これは南陽慧忠―耽源応真―仰山というふうに伝承されたといいます。仰山の弟子には新羅僧があり、のちに新羅に帰

って活躍しますが、そのために円相の宗風も半島に伝わり、『宗門円相集』という著述が高麗の禅門から生まれています。

さて、まず万松さんによる〔示衆〕を、例によって意訳で示しましょう。

「まだ話さんのに互いに消息が通じるのを以心伝心といい、はっきり云わんでも自然に顕われるのをアウンの呼吸ピッタリのはたらき、というのじゃ。三門の前で手を合わせ、東西の廊下で経行するのも、みんなそうしたはたらきよ。では、中庭で踊ると門外でそれにへつらうというのは、いったいどうだろうな。」

こんなところでしょうか。原文には耳なれないことばが二つあります。黙論と暗機です。これは、仰山が円相のはたらきを示した「円相六義」の中の二つで、「黙論」は言葉によらずに機縁がピッタリ契うこと、「暗機」もまた暗黙のうちに呼吸が合うことですから、ともに同じような消息です。中庭で踊ると門外で調和するとは、まさに意気投合、同道唱和の妙契です。

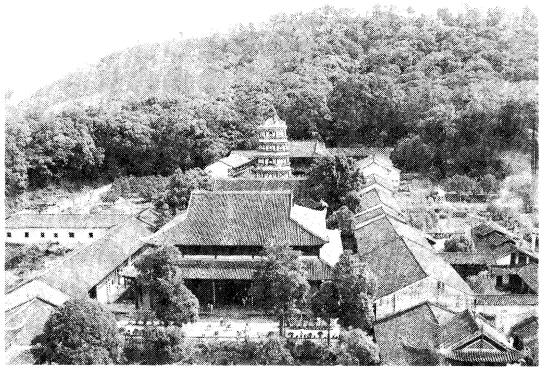
そこで〔本則〕を、これも意訳してみます。

潙山が仰山に聞いた。「どこへ行ってたね。」仰山「田んぼの中です。」潙山「田んぼには誰がいたかね。」仰山は持っていた鍬を肩から下し、叉手して立った。潙山「南の山では立派なご人が茆を刈っておるワイ。」仰山は鍬を手にしてサッサと立ち去った。

こんなところ。禅問答のわかりにくさは、木に竹をついだ言動だからですが、これはよけいな枝葉をとりはらっているためです。それよりも、禅僧たちの深い心境に肉迫できるかどうかが眼目。

右の問答は、まだ仰山が大潙山で修行時代の機縁です。鍬をかついで戻ってきた仰山に潙山があえて「どこに行った」と聞くのは、仰山の主体性に対する鋭い問い。それがちゃんと分かっている仰山は、「田の中」という現実の作務する中に具わっているという答え。すかさず潙山が「そこにいたのは誰か」とたたみかけたので、鍬を置き叉手して立ったのは「ほかならぬこの私です」との意志表示。他の何物にも障えられぬ独立独歩の境地です。

ふつうの雲水ならば、潙山もそれでよしとしたでしょう。が、相手は神足の仰山、なお、「南山には茆を刈っている人がおる」と、さらなる向下門を求めた。南山の人がだれであろうと、衆生済度が大切なことの間接的な教示です。そこで仰山は、ふたたび鍬を手にして立去り、実践に赴いたのでした。



仰山が修行した南華寺の全景

こう理解して万松さんのコメントをみると、なんとみな的確なことか。「草に落つ」は仰山の実践行を、「草を打って蛇を驚かす」は潙山の婉曲な意志表示をそれぞれ賞め、「父子両箇」は両者の親密な消息を示しているのです。たしかに、「収来太速」と結ぶように、総じてこの則は潙仰父子の意志妙契に彩られていること、さきの〔示衆〕が示すとおりであります。

こうした言語以前の無分別による意志の疎通は、人間同志のすばらしい特性ですが、実は動物のほうがもっとすばらしい。それは、誰でも日常体験するところ。私は賢いイヌよりも愚直なネコが好き。それも、いちばん野性的な日本キジネコ。なつかせるのがたいへんなだけ、なつくと必ず応え情の深いのがたまらない。でも、意志疎通も何かが欠けていると思わぬ失敗を犯します。私は親しいイトコと登山の約束をし、支度をして駅で待てどもイトコが現れず、一日間違えたことを知りました。何が欠けていたのでしょう。

それは、不断の実践でつちかわれる智慧の力でしょう。道元禅師は「行住坐臥は般若なり」と、仏教者の日常は智慧の具現であると教えられます。仰山の円相も、このハンニャの象徴的な表示でした。こうみると、動物的な意志疎通の背後に、深い智慧を養うようにつとめたいものであります。

奕堂さんの禅風に学ぶ

―第二二回成道会―

一二月五日、第二二回成道会が四〇名の参加をえて龍泉院本堂で行われました。前日の嵐が夜明けにはおさまり、台風一過のような静かな暖かい日となりました。朝早く来て、折れた木の枝葉を掃除された方々のお蔭様で、境内は嵐が嘘のようでした。

成道会はお釈迦様がお悟りを得た日の報恩の行事で、参禅会会員の配役で行われます。二炷の報恩坐禅のあと、法要、問答、法話があります。今年も梅花講の皆様の詠讃歌で法要が始まりました。

また参禅二〇年を讃えて、安本さんと五十嵐さんに椎名老師の揮毫が贈られました。法話は毎回、曹洞宗の名僧、高僧碩徳の方のお話をいただいておりますが、今回は、梅崖奕堂さんでした。以下概略。

生まれは名古屋の平野甚右衛門という士族の三男坊。文化二年の元日のお生まれです。さて、奕堂さん六歳の時に、お父さんが病気で亡くなります。

出家して衆生済度して欲しいと言う父親の遺言に従い、近くの曹洞宗の聖応寺で出家します。小僧ですから庭掃きなどをし、読み書きそろばんを習う。暁林和尚について学問し、論語や大学などの漢籍一般を暗記するまで覚え、一四歳の時、正式に出家得度します。

一八歳になると愛知県内の大勢雲水のいるお寺へ武者修行に出ます。当時の記録では奕堂さんの身の丈六尺二寸、今の一八六センチ、体重百キロという堂々たる体躯です。

翌年、一九歳の時に道契和尚に指導を受け、二年間徹底的にしごかれる。そして、三つの請願を立てました。第一、生死の問題を解決するためには誓って修行を忘らない。第二は、一日、片時なりとも仏道に背く行為は絶対行わない。仏教の尺度に沿った生き方をする。第三に、この誓願を一生涯貫く。この三つを一九歳の時立てたと言うから、並の人間じゃありません。

その頃、美濃、今の岐阜県で来応和尚に参学します。二六歳の時にはついに門下生一千人と言われている龍泰寺の第一座である首座となりますが、暁林和尚の恩を忘れず、その法を嗣ぎます。

三四歳の時、三河・香積寺の風外和尚について足掛け十年間、禅を学び学問に励みます。風外和尚は「たこ風外」とも言われ、絵が抜群に上手く学問に優れていました。風外和尚が楞厳経を講義していた時に、心に拘ってはならないという一節を聞いて大きな悟りをひらき、風外さんから印可証明を受けました。

奕堂禅師は、徳があった方ですから、方々の授戒の戒師に招かれて説法しました。そういう時は常に五〇名の雲水が従っていました。六二歳の時、豊川稲荷で有名な妙厳寺で大授戒会が行われ、七日間に三万五千人に血脈を授けましたが、お手伝いで集まった坊さんが一九二名。これは曹洞宗の宗門史上、最大空前絶後の大規模な授戒会でした。

明治三年に六六歳の時に總持寺の独住第一世に迎えられました。總持寺はそれまでの輪住制を改め、明治になって独住制にかわりました。皇室から弘済という禅師号をうけ、七〇歳の時に曹洞宗の初代の管長様に就任しました。第一世としての素晴らしい働きをし、總持寺が当時抱えていた巨額の負債を解消し、全国を巡化行脚、弁道に尽力しました。そして明治一二年の五月、山形県の龍門寺でお授戒の戒師をつとめます。この時の戒弟さんは九九七名でしたが、これが最期のお授戒になりました。当時疫病が大流行しており、奕堂さんはそれに感染してしまったのです。

同年九月二四日、山形の善宝寺さんの授戒に臨みましたが、寺に着いた時には衰弱しきっており、入浴後、眠るが如く遷化されました。授戒のために集まった雲水た

ちは、期せずして入滅供養になってしまったのです。ときに七五歳でした。

奕堂禅師は体力抜群の力持ちで、冬はどんなに寒くとも足袋を履かず、質素倹約に努め、金沢天徳院時代は、城主から支給があった羽二重の褌さえ、もったいないと言って半切の揮毫用にしました。

雷を落とす熱血漢の反面、なんでも綿密で丁寧でした。そういった精神は何によって養われたかと言うと、やはり禅定、坐禅です。道眼は理知に富み、識見は極めて高く、文字は達筆で風格があり、手紙は懇切丁寧、目下のものに対しても、奕堂九拝と書きました。厳しい中にも温情溢れる人柄で、誰からも慕われたのです。

書かれたものにも人柄が表れています。「雪に和して薫る一朶の梅花」。花をつけた梅が雪に和して、ほんのりといい香を発している。人間もどんな環境にあっても素晴らしいものを輝かせようじゃないか、という意味です。文字は達筆で柔らか味があり、温情がその中から窺えるようであります。奕堂さんにあやかればと思い、ご紹介した次第です。

ご法話のあと、食事を頂戴しました。典座役は今年も松井さんにお願いしました。またご参加の皆様から多くの添菜をいただきました。感謝申し上げます。道友の三町さんからは、くじ引きで五人の方に、仏像の写真が贈られました。暖かい日差しが差し込む昼過ぎ、釈尊の成道に感謝の念を懐きながら、散会いたしました。

初めての成道会の感動

我孫子市　小畑　二郎

早いもので、昨年（平成一六年）三月の月例会にはじめて参禅させていただいて以来、約一年間、何から何まで、初めての体験ばかりで、そのつど新鮮な感動を受けてまいりました。

坐禅の体験はもとより、そのあとの椎名ご老師のお話からは、多くの感銘を受け、毎回楽しみにしております。特に昨年一一月の例会で、「人生は楽ではなく苦しいことが多い。しかし苦しいことを楽しむ気持ちがなければ本当ではない」と言うようなご主旨のお話がありました。

このお話は私の人生観を大きく変えてしまったように思います。これまでは苦しいことをなるべく避けようとしてきましたが、このお話のおかげで、これからは苦しいことにあえて立ち向かっていけるような気がしてまいりました。

さて、はじめての成道会についてですが、どなたかが座談会の折におっしゃっていましたが、私も梅花講の方々の詠讃歌をお聞きした時、目頭の熱くなるのを覚えました。日頃、めったにこのようなことはないのに何故だろうかと、つくづく考えさせられました。

たぶん、二千年以上前に遠い印度の国で釈迦如来の大覚醒によっておこされた仏の教えが、遠い今日の我々の前に、こうして立派に伝えられていることの歴史の重み、仏の教えの有難さを、私なりに受けとめることのできた感動ではなかったかと、今では独り合点致しております。

また、ご老師とご先輩方々との問答からも強い感動を覚えました。「なまけ心をもつのは、なまける時間をもつからだ」とのお答え、簡にして要、この上なく明解なご返答に、ハッと我に返る思いがいたしました。

これまで、主として西洋に源流をもつ学問から学び、仏教とはおよそほど遠い生活を送ってまいりましたが、一念発起し、龍泉院に参禅いたすことを決断いたしました。偶然にも最初にご指導いただいたのが私と同姓の小畑節朗氏でありました。

氏が仏教や漢籍に大変ご造詣の深いお方であることは、後で知りました。氏にはご迷惑かもしれませんが、私はこのことを有難いご縁だと感じております。

これからも月に一度の例会を楽しみにしてまいりたいと存じます。貴重な機会を与えてくださった皆様方に心から感謝申し上げます。

多謝、合掌

成道会に参加して

龍泉院梅花講員　小川知枝子

季節はずれの台風が去った後、澄みきった青空の下、一二月五日の静寂さに包まれたご本堂で、成道会が開催され、緊張のうちに、ご詠歌や、ご和讃を奉詠させていただきました。

椎名方丈様が、お話して下さった奕堂梅崖さんという立派なお方は「終生修行を怠らなかった」ということに、普通の人とは違う意思の強さを感じました。

また参禅会の二〇年のお二方に、方丈様から素晴らしい記念品が贈られ、いただくお二人の晴れやかな笑顔の中にも、やる気が一層増したように思われました。

終了後、色彩豊かな菊飯や数々の手料理をご馳走になり、大変おいしくいただきました。でも、食事作法の心得のない私は、見よう見真似で「沢庵一切れに意味あり」と実感し、得難い体験を致しました。

更に、はじめてのくじ引きでは大当たりで、素的な仏像のお写真をいただき、これから先、ずっと私をご加護いただけるような気持ちになりました。ありがとうございました。

参禅会皆々様のますますのご精進をお祈りいたします。

参禅二〇年

柏市　安本小太郎

昭和五九年八月、暑い日「大法輪」でみた龍泉院を訪ねた。自宅から自転車でタンクトップ・短パン・下駄履き姿で龍泉院に行き、玄関のベルを押す。坐禅会に参加させて頂きたいと申し出ると、作務衣姿の坊さんが「一・二回で来なくなるなら、来ない方が良い」と言われる。「八年程やっていますので大丈夫でしょう」「それでは名札をつくっておくので来なさい」。あの時の茶色の目が今でも印象に残る、椎名老師との出会いであった。以来、よほどの事が無い限りは参禅して二〇年が過ぎ、この度「空裡を歩め」の力強い額を頂いた。

九時止静、一炷三〇分、経行、二炷目三〇分、開静。正法眼蔵講義一時間、茶話会のスタイルは、現在も変わっていない。普通一炷は四〇分位だが、ここは高齢者が多いので短くしてあると、後程老師より伺った。

毎年の六月の一夜接心は、蒸し暑くじっとりと汗の出ることが多い。私は昭和六二年六月の群馬県迦葉山龍華院より参加したが、袋井市の可睡斎での一泊参禅会は、特に思い出深いものであった。控室で、柏あたりの五割増はあろうと思われる藪蚊を見て、これに刺されたら大変だと思った。だが坐禅堂には窓に網が張ってあるし、しばらく坐っていると、香とは違った嗅が下から立ち登って来た。我々のために蚊取線香を焚いて下さったのだと気付き、心の中でそっと手を合わせた次第である。

中国旅行では第二回の西安での渭水の分かれの話が印象に残っている。龍門石窟前の渭水は、水草を浮かべた巾五米位の川であった。昔、長安を訪れた客人を三日も歩いて渭水迄見送り、楊の枝で造った輪を渡して別れを惜しんだとのこと。道昭、玄昉、最澄、空海等もこのような見送りを受けて帰国したのか。

椎名老師の正法眼蔵の講義でよく述べられる唐代の禅僧の素晴らしさは、この様な重厚で丁寧な気遣いが底辺を支えて、ずば抜けた人物を輩出したのだと思う。高間さん、森岡さん、沢村さん、中川先生、染谷さん等など、物故者の方々も今は懐かしい。

近年は退職者で参禅される人が増え、メンバーも多士済々、質量とも充実している。これも椎名老師と古参の方々の力量と三〇数年の相続の賜である。私も「空裡歩」を嚙締めて精進したいと思う。

もう「上山二〇年」

柏市　五十嵐嗣郎

今年も第二二回の成道会を迎えました。毎回法話の後、二〇年参禅された方へご老師から額装された讃が贈られます。今年は安本さんが呼ばれ、見事な額をご老師よりより戴いているお姿を眺めていると、司会者から突然私の名前が告げられました。「え！私も二〇年表彰」と一瞬驚き、席を立ってご老師の前に行き、立派な額を戴きました。

ご老師から戴いた額には、直筆で「無寒暑」と書かれていました。

これはご老師からも説明がありましたが、洞山良价悟本大師の有名な偈で、皆さんご存知の言葉だと思います。

今年の九月、中国江西・湖北省の佛蹟を巡る旅でも洞山に拝登しましたが、途中悪路でバスが動かなくなり、大変難渋したのはまだ記憶に新しい所です。

「無寒暑」は私の好きな言葉のひとつです。暑い時は汗をタラタラ流して夢中になって働き、ブルブルふるえるような寒い時にでも、じっと我慢して仕事に励む。そこにこそ真実の世界がある。

人は大自然の中に生まれて生きている以上、暑さ寒さから遁れる事は出来ない。しかし暑さ寒さに対する不安や不快感あるいは恐怖心を取除く事は出来るのです。

生死も同じ事で、生きるときは徹底、渾身の力で生きるだけ、死ぬるときはただ死にきってしまう。生きたり死んだりすることの他に別に永遠不滅のおんいのちと言うものがあるわけではないのです。自分勝手につくりあげた人生の不安や恐怖心にふりまわされない事です。

頭の中ではこのような事柄を知識として理解していても、体で体得していなければ、実行されないのです。知識を実践に移すには、どうしても坐禅が必要なのです。坐禅を通じて具わったものが行動へ反映されていくのです。

自分で勝手につくった不安や迷いに悩んでいる人々が多いこの頃、「無寒暑」に重大な意味があることを「理解」できたのは、二〇年参禅会にお世話になったお陰です。

今年の秋から明珠の編集委員に加えていただきました。人から教わったり、本を読んで得た知識を、貯め込むばかりでは本物ではない。自分の考えや行動を人に伝える事により、自分を律する事ができるのではないでしょうか。

編集委員になった特権（？）として、次回の明珠から毎回何がしかの駄文を寄稿したいと思っておりますので、皆様からの厳しいご指摘をお待ちしています。合掌

初めての半日托鉢修行記

柏市　杉浦上太郎

平成一六年一二月一八日の半日、曹洞宗千葉県第二教区が主催して毎年行われている「年末助け合い」募金活動に、椎名老師に従って、安本小太郎氏、今泉章利氏とともに参加させて頂きました。

当日は、午後〇時三〇分に柏駅近くの長全寺様に、近隣寺院の僧侶様、檀家役員、参禅会会員の総勢二〇余名が集合しました。

身支度を整え、本堂前で般若心経をお唱えし、二列縦隊にて整然と柏駅へ向かいました。

柏駅東口コンコースに、三々五々散らばり、午後一時三〇分頃より募金活動の托鉢が開始されました。椎名老師を中心に、安本氏と私は両サイドに陣取りました。

当日は、土曜日でもあり、コンコース上は、大勢の歩行者以外に、チラシ配りをする若者たち、仮店舗らしきものを設営し、大きな音量で音楽を流し営業活動をする人、何組もの路上ライブ奏者と群がる人々と、甚だしい騒音の中での托鉢となりました。

托鉢中の杉浦・今泉両氏

当初、托鉢をするには、いささか相応しくないと思い、戸惑いがありましたが、出発前の寸時に、長全寺の若住職様に、托鉢の心構えをお尋ねし「只管無心で」とお教えていただいたことを思い出し、これは、修行をさせていただくのだと思い直して立つことにいたしました。

私が、この托鉢行をさせていただきたいと思った動機は、数年前のある日の情景からです。

椎名老師は、毎年欠かすことなく、この恒例行事の「年末助け合い」托鉢に立たれておられます。私はやむない用事がない限り、喜捨をさせていただきに伺っておりましたが、ある年の氷雨が降る寒い日、粛然と立たれておられる椎名老師を拝見した瞬間、今まで感じたことのない激しい思いにおそわれました。

〝自分は喜捨をするということで優越感に浸っているのではないか。師が托鉢行をされ、弟子は喜捨をしているという主客のような関係は誤っているに違いない。嗚呼恥ずかしい〟と。

それでもまだ行動の決断ができずにおりました。が、一昨年、大雨のため、この托鉢が中止になったおり、私はささやかな喜捨をと思い、長全寺様に伺いました。

その時、偶然居合わせた他の参禅会の方と話をする機会に恵まれ、托鉢に随喜する時の心掛けにつきお聞きすることができ、意志が固まりました。その場で、勇気を奮って、椎名老師に托鉢行への参加を願い出た次第であります。

その日は、誠に気付きの遅い、弟子ともいえない不甲斐なさを、改めて噛締めた日でもありました。

愈々の日、多くの方から喜捨を賜りました。思いもよらなかったチラシ配りの青年から、告別式帰りと思われる同年輩の男性から、小銭ばかりの財布から喜捨された年配女性等々。金高ではなく、喜捨される行為が誠に尊く思え、その都度、心からの合掌低頭をし、その方への謝意と幸せを願って、般若心経を唱えさせていただきました。

午後四時、釣瓶落としの日が落ち、托鉢行が終わりました。

行の功徳を賜りました。仏縁に感謝。椎名老師に感謝。会友に感謝。多くの人々に感謝する日となり、清々しい思いで家路につきました。

合掌

ブッダ最後の教え

我孫子市　清水秀男

一　八〇歳になられたブッダは、自分の身体の老いを自覚され、ラージャグリハ（王舎城）の霊鷲山から故郷のカピラヴァストゥに向って、アーナンダ（阿難）と共に最後の旅立ちを挙行される。途中、信者の鍛冶工チュンダの供養した食物にあたり、クシナガラの地において入滅された。

ブッダの最後の言葉は、「**もろもろの事象は過ぎ去るものである。おこたることなく修行を完成なさい**」である。（『ブッダ最後の旅―大パリニッバーナ経』　中村　元訳から）

すべては無常であることを自分が死ぬ事を通じて身を持って示され、真理を覚するまで決して怠ける事なく奮励努力しなさいという温かくも厳しいお示しである。よく味わってみたい。

二　無常というと、とかく良い意味には解釈されず、死、破滅・破局、別離、病気とか悲観的、絶望的な状況において使われるケースが多い。

しかしよく考えて見ると、無常とはすべてのものは移り変わって留まることがない。即ち変化することを指し示しているのであり、変化とは悪い変化ばかりでなく、良い変化もあるのである。

もし変化せず、固定的であるならば、我々はどんなに努力しても報われないのであり、挑戦しても意味を持たず、運命論的にならざるを得ず、これこそ悲観的・絶望的である。

無常であるからこそ、自分自身（健康、品格、心、知識、富、能力等）を変える事が出来、社会（環境、教育、経済、産業、政治等）を変える事が出来る。変化があるから人生面白いのであり、生きる意味があると思う。

三　しかし、我々は変化するとは理屈では分かっていても、実感していない。卑近な例で言えば、生あるものは死が訪れると一般論で分かっていても、自分には関係ないと思っているか、意識的に考えようとしないかのいずれかである。

従って、実際死が訪れると恐れ、悩み苦しむことになり、死は苦ということになる。

一方自分は能力がないから、とってもある専門分野で一流になれないと思って何もしなかったら、いつまでも変化が訪れない。挑戦してみることである。動けば必ず良くも悪くも結果が出る。

人間は必ず、ある分野のある部分では他人に絶対代替出来ない素晴らしい能力がある。それを見つけること。それが社会に貢献出来るものであればこんな幸福な事はない。子供の教育もそれがポイントである。

四　無常の素晴らしい教えは、更に我々にプレゼントしてくれる。

一つは変化しているのだから、あることにいつまでも執着していても意味はないことを自覚せしめてくれる。富力、地位・名誉、能力を誇ってもいつかは滅びる。

逆に貧、権力もなく、地位・名誉もなく、能力がなくとも努力次第で何とかなる可能性がある。楽観も悲観もなく、すべての事に謙虚になれる事である。

もう一つは、無常故に現在の一瞬一瞬は取り返しのつかない永遠の今である。従って、今、ここにおいて悔いのないよう最善を尽くす必要がある事を教えてくれる事である。これはまさにブッダ最後の言葉、「おこたることなく修行を完成なさい」そのものと言える。

五　この稿は二月にしたためている。二月一五日は「三仏忌」の一つである涅槃会（ブッダのご命日）である。上述の大パリニッバーナ経には最後の言葉の前に、アーナンダ（阿難）へブッダが言われた次の一節がある。

「アーナンダよ。あるいはお前たちはこのように思うかもしれない、『教えを説かれた師はましまさぬ、もはやわれらの師はおられないのだ』と。しかしそのように見なしてはならない。お前たちのためにわたしが説いた教えとわたしの制した戒律とが、わたしの死後にお前たちの師となるのである」

ブッダのご遺徳を偲び、ご供養申し上げると共に、ブッダの説かれた教えと戒律とを師とし、それを身心にて行ずることをお誓いし、筆を擱く事とする。

以上

龍泉院の涅槃図

大いに語りあった新年会

二月六日（日）、柏市内の「木曽路」で恒例の龍泉院参禅会の新年会が催されました。当日は一七名の会員が集まり、最初に椎名老師よりご挨拶をいただきました。その中で「参禅会も今年で三四年目を迎えますが、継続することは素晴らしいことです。この新年会も一五回を数え、定着してきています。ふだんは多数の人が胸襟を開いて、話し合う機会が少ないので、この会で賑々しく、楽しく語り合って欲しい」と述べられました。

寺田（哲）様の乾杯のご発声で祝宴がスタートしました。参加者各自から参禅会への思いや今年の抱負などが述べられましたが、美川様の奥さまから、当日が美川さまご夫妻の結婚四〇周年の記念日にあたるとのご報告があり、宴席は一気に盛上りました。

龍泉院参禅会簡介

一、**日　時**　毎月第四日曜九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと）四月は八時半より坐禅作法指導

一、**坐　禅**　第一炷　口宣、坐禅三〇分
経　行　一〇分
第二炷　坐禅三〇分

一、**講　義**　木版三通、開経偈を唱え、椎名宏雄老師より『**正法眼蔵**』の提唱を聞く。現在「諸法實相」の巻

一、**座　談**　自己紹介の後、茶を喫し座談。正午解散

一、**参加資格**　年齢、性別を問わず、どなたでも参加できます

一、**会　費**　無料

一、**成道会坐禅**　月例参禅会の外に、毎年一二月の第一あるいは第二日曜（本年は一二月四日）釈尊成道を讃え坐禅、成道会法要後、法話を聴聞、点心を共にする

一、**一夜接心**　六月上旬（本年は六月四・五日）、一泊し、七炷の坐禅とご提唱を聞く

沼南雑記

参禅会記録（　）内は座談の司会者

平成一六年

●一〇月二四日　二五名
（阿部史子氏）

●一一月二八日　一八名
（佐久間祐一郎氏）

●一二月五日
第二二回成道会　四〇名
（内、梅花講員　五名）
導　師　椎名宏雄老師
総幹事　小畑節朗氏

●一二月二六日　三四名
（安本小太郎氏）
禅講の後、龍泉院煤払い

平成一七年

●一月二三日　二六名
（松井　隆氏）

●二月六日
新年会　一七名　於・木曽路

●二月二七日　二六名
（清水秀男氏）

▼昨年の年番幹事加藤孝氏・富澤勇氏ご苦労さまでした。今年は大坂昌宏・晶子ご夫妻が担当されます。ご夫妻での年番幹事は初めてだと思います。どうぞよろしくお願い致します。

▼成道会に初めて参加された、白井市の伊藤さんから届いた手紙の中に、ご一緒に来山されたブランドンさんから、「間」について分かりやすい説明を求められ、困っていると書いてありました。また、小畑さんが仰しゃった「一期一会」にあたる英語は無いが、似た諺に「毎日を、人生最後の日だと思って生きろ」という英語があるそうです。ちなみにブランドンさんは自転車事故で頭蓋骨にもヒビが入る重傷を負ったものの、無事退院して帰国されたそうです。

▼ある新聞の社説によれば、昨年のノーベル平和賞を受賞したケニアの副環境相ワンガリ・マータイさんがしばしば日本語の「もったいない」を口にするそうだ。地球環境の大切さを訴えるこれ以上の言葉はない。「つなみ」や「カラオケ」は世界語だが、「もったいない」も世界語に加わってもらいたいと。同感である。（五十嵐）

▼地球温暖化防止へ向けて京都議定書がようやく発効し、各国に数値目標が掲げられました。物を大切にし、ゴミの減量など身の回りでできる節約を心掛けたい。

▼龍泉院では二月一日から一五日まで、本堂に釈尊のお亡くなりになった様子を描いた涅槃図を掛けています。来年は拝観してはいかがでしょう。（佇泉）

●発　行／天徳山龍泉院　千葉県柏市泉81　☎04(7191)1609
●印　刷／岡田印刷株式会社　柏市高田1116－45　☎04(7143)3131